ACROSS/e-dream-s原稿集

お勉強と芸の向こう側

Native Speakerが教師として優れているとは限らないし、英語が非常によくできるNon-Native Speakerの教師がそうでない教師より教え方が上手いとも限りません。限らないのですが、これはNon-Native Speakerの英語教師が英語を勉強しなくても良いということでは、もちろんありません。できないよりできる方がいいに決まっています。

では、どの程度できれば良いのかという話になりますが、文部科学省は「英語教員は英検準１級、ＴＯＥＦＬ５５０点、ＴＯＥＩＣ７３０点以上が目標」としています。確かに英語教師としてはこの基準ぐらいはクリアして欲しいところですが、この種のテストで計測できる事には限界がある事には注意が必要です。英検を除けばスピーキングのテストはないし、教師のための試験ではないので、発音が「国際英語」の範疇にあるかどうかもわかりません。なにより、テストである以上何回も受験し適切なテスト対策を取ったものが実力以上の結果を残す事は避けられませんが、まあそれは置くとしましょう。

では「英検準１級、ＴＯＥＦＬ５５０点、ＴＯＥＩＣ７３０点以上」をクリアした英語教員が、スピーキングも発音もその得点並にできるとして、英語教師として望ましい英語力をつけたといえるでしょうか。

これがなかなかそうも言えないんですね。私の経験ではそうも言えない典型は２つあります。ひとつは英語の勉強が好きで、上記のテストでもかなりの高得点をとっているのに、自意識過剰と失敗を恐れるあまり、実際のコミュニケーションにほとんど参加しないタイプです。このタイプの教師がいくら生徒に失敗を恐れず英語で話しましょうといっても、まさに口先だけのお題目に過ぎませんね。

もうひとつは、確かによくしゃべるけれど、内容が伴わないタイプです。内容が伴わないというのは、別に難しい事を話せと言う意味ではありません。内容がある事を話しなさいと言う事です。つまり自分がスラスラと話す事に主な関心があり、自分が何を言いたいか相手が何を聞きたいかと言う事にほとんど注意を払わないタイプです。このタイプの多くは同僚との日本語のコミュニケーションも上手く行かず、またそのことに本人も気付いていないことが多いようです。

この両タイプに共通するのは、英語を「ことば」として捉えていないということです。前者にとって英語はあくまで「お勉強」であり、後者にとって英語は「芸」なんですね。

繰り返しますが、英語はできるに越した事はないですし、文部省の言う基準もクリアすべきです。加えて、上記２タイプのような「お勉強」や「芸」としての英語を超えるためには結局、「お勉強」や「芸」としての英語では、通用しない場に自分で自分を置くしかありません。それはつまり、「自分が責任を持って成し遂げるべき目標があり、そのために英語を使わなければならない場」です。

実はアジアツアーから発展したECAPは、そのための理想的な機会なのです。参加者は、相互理解

教材の英語原稿を合宿中に仕上げると言う目標のために、日本語や英語の文献を読んで下調べをし、それを英語で説明できるように準備をし、合宿中は英語で議論し、英文を書かなければなりません。実行委員会のメンバーであれば、これに加えて、ホテルや観光業者と交渉し、韓国の先生方と打ち合わせをするという責任がありますが、e-mailにせよあって話をするにせよほとんどが英語です。

これだけやって英語が上達しないわけがありませんし、その過程で磨かれた英語は、英字新聞、英会話教室、ヒアリングマラソンなどで得られる「お勉強」英語を越えたものであるはずです。

2003-9-12

私はモグラ

云わば教師はモグラである。毎日穴を掘るのが仕事だ。穴掘りといっても単純ではない。「授業」とか「会議」とか「掃除の監督」とか「クラブの顧問」とか穴掘りにも色々ある。なかには「暴力事件」とか「問題を抱えて学校に出てこれない生徒と話す」とか地盤が堅かったり、どう掘ればいいか分からない骨の折れる穴掘りもあるが、とにかく目の前の穴を毎日掘らなければならない。

穴掘りというと何だか暗いイメージだが、結構楽しいこともある。よく掘ってくれましたと感謝されることもある。だれも褒めてくれなくても上手く掘れたら達成感もある。年季が入ると、どの順番でどう力を入れて掘れば短時間に上手く掘れるかが分かるようになって「モグラ稼業も板についてきたな」などと満足感に浸ることもある。もちろん、とてもシャベルの歯の立たない穴もあって悲しい思いをすることもあるが。しかし、とにかく毎日せっせと穴を掘るのだ。だってモグラなんだから。

しかし、モグラは時々思うのである。「穴掘りは意義のある仕事だ。仕事だから辛いこともあるけれど、楽しいこともある。穴を掘るのも我ながら上手くなった。でもこの穴は掘るとどこに行くんだろう。今まで自分が掘った穴や、いろんなモグラが掘っている穴はどんな模様になっているんだろう？」それが分かるには目の前の土ばかり見ていてはだめだ。ちょっと地上に出て見なければならない。

しかし地上に出るのは簡単ではない。費用も時間もかかる。地上に出ている間は穴が掘れないから、後でその分余計に穴を掘らなくちゃならない。それに、地上に出たとしてそれが何だというのだ。ちょっと見晴らしはいいかもしれないが、穴掘りが上手くなるわけではない

だから大部分のモグラは、また毎日穴を掘り続ける。しかし中には「やっぱり一度地上に出て、よく見てみる必要があるな」と思うモグラもいる。

そんなモグラは、時間と金を使って地上に出る。出てみると、同じように考えて地上に出て来た他の巣のモグラがいて、いろいろ話したりする。なかには穴掘り大学院に行ったという変り種のモグラもいる。「所詮穴掘りは穴掘り、腕一本で掘ってきた俺には無用だぜ。穴掘り大学院なんて、穴掘りの下手な奴や、毎日の穴掘りがいやになった奴が言い訳に行くところさ」などと考えていたのだが、そういうわけでもないかなと思ったりする。話に聞いていただけの、外国のモグラと出会って外国の穴掘り事情に驚いたり共感したりする。それよりなにより地上からは、穴掘りの様子がよく見える。自分の掘った穴もよく見えるし、他人の掘った穴もよく見える。なるほど穴掘りとはこんな仕事だったか、と妙に納得したりする。

そしてモグラはまた地下に戻る。しばらく、穴掘りを休んでいたから、掘らなければならない穴がたくさんある。お金も使ったからちょっと貧乏になった。地上に出ていろいろ見聞きしてきたが、シャベルの使い方が上手くなったわけでもない。土だってやっぱり堅いところは堅い、難しい穴は難しい。やれやれやっぱり穴掘りは大変だ。

でも、なぜかモグラは後悔していない。モグラの仕事のことが、ちょっと深く広く理解できたような気がするということもある。ほかのモグラと話して勇気づけられたこともある。でも、一番は自分の仕事を上から見たことだ。モグラは思う。同じように穴を掘っていても、目の前の土しか見ていないモグラと、世界を知っているモグラは違うんだぜ。時々は地上に出ないとだめだな、と。そしてまた時間とお金を工面して地上に出ようと思うのである。

そして、モグラはシャベルをまた手に取り、今日も明日もせっせと穴を掘るのである。だってモグラなんだから。
2003-12-14